

# 東大生協OBの会通信

発行人  
矢野和博

編集  
対馬 芳

## あのころのこと 青春の駒場

思い出を語る。今回は1950年代の駒場について3人の方々にお集まりいただき、お話を伺いました。

出席者

- ・ 嶋根 (増田) た美さん (1949~57年、一高雑貨部、ホール「食堂・喫茶」、書籍部、購買部、本部、買い物相談所)
- ・ 今井 隅田さん (1952~58年、駒場書籍部↓本郷書籍部)
- ・ 安藤 (文入) 次子さん (1952~61年、ホール「食堂・喫茶」、購買部、買い物相談所、本部↓本郷婦人コーナー、農学部など)

\* ( ) 内は旧姓 数字は駒場在籍期間

入協の頃 一高雑貨部から東大生協駒場支部へ

(嶋根) 私が入ったのは1949年、当時はまだ一高雑貨部とっていました。1949年に学制改革で一高が東大教養学部となり、50年に東大生協駒場支

部が発足すると、寮委員会が運営していた雑貨部と喫茶部を引き継ぎました。当時は5号館の中のすみの小さいところに雑貨部がありました。それが、新生東大になったときに広い部屋をもらってその横に書籍部をつくることになりました。50年頃から学生委員も変わり、民主的な学生が入ってくるようになりました。小倉寛太郎さん(\*)もその時に入ってきました。その頃から、きちんと試験をやって、まじめな人を採用するようになりました。その時にうちの主人(\*)も採用されたんです。書籍部をつくらうということになりました。主人は勤めていた出版社がつぶれて、失業していたんです。それで書籍のことが詳しく、東大の先生方と相談して、取次店を何軒か選び、交渉して本を仕入れたんです。なにしろ、お金もないのに、店舗を本で埋めなくてはならなかった。

\*小倉寛太郎さん：(故人) 1949年新生東大第1期生、生協、学友会、自治会の創立にかかわる。卒業後日本航空に入社、山崎豊子作『沈まぬ太陽』の主人公(恩地元)のモデルとして有名。  
\*嶋根善太郎さん：(故人) 嶋根た美さんのご主人、当時書籍部主任、後、常務理事。東京生協理事長などを歴任。以後、文中、「嶋根さん」は嶋根善太郎さん、「た美さん」は嶋根た美さんを指す。



駒場支部創立5周年記念(1955年)前列右端嶋根た美、右から4番目嶋根善太郎、6番目小倉寛太郎、3列目左から3番目安藤次子の各氏。

(今井) 僕が採用された時、嶋根さんは東北大の学籍があったね。  
(嶋根) そう、仙台に試験を受けに行っていました。働кинаがら勉強して家族を養っていたんです。結婚したのは、私が23、主人が26歳の時でした。  
(今井) それが事件だった。当時生協で結婚するなんて無謀といわれたんだからね。嶋根さんたちが生協職員としての結婚第1号で「生協で結婚できる」とみんなに希望をもたせたんだ。  
(嶋根) 結婚式は同窓会館で、100人くらい集まりました。東大の先生もいっぱいきてくださった。  
(安藤) 私が入ったのは1952年の10月です。当時、東大の学生だった高校時代の先輩が、駒場生協で職員を募集しているのを受けてみないかと勧めてくれたんです。

面接試験で採用がきまったんですが、出勤の初日から遅刻してしまいました。間違っていた井の頭線の急行に乗ってしまったんです。私が初めて経験したこと、に仕事の他に労働組合の活動があります。今思うと、ずいぶん言いたいことを言っていた気がします。こうして駒場を皮切りに、他の大学・地域生協を経験し、結局36年間生協で働いたことになりましたが、そのスタートが駒場であったことは幸せでした。  
—その先輩はご主人ですか。  
(安藤) そう、結婚したのは後ですけどね。  
(今井) 僕が入ったのも1952年、文入さんの10日くらい後だった。長野県岡谷で旋盤工として働いていたのが、不況で失職し、メーデー事件などに刺激されて上京し、先輩の東大生の勧めもあり駒場生協の面接を受けました。親父も一高・東大だったし、伯父もその息子も東大教授だったこともあり、わりと東大には親近感をもっていました。試験官は嶋根さん、安藤さんと学生委員が数名いました。面接で聞かれたことは、労組と協組はどう違うか、尊敬する人物は、感銘した書物などは、ほとんど生協の仕事と関係のないことでした。当時の職員は、昼間働いて夜学校に通いながら、自分の人生を切り開いていこうという人が多かった。世の中に出ていくための、いわば腰掛けといった雰囲気だった。それで、一高雑貨部から生協になって、本気にならずと働く人を採用しようではないかと、そういう時

代にたまたまめぐりあった。

当時の仕事

(嶋根) 私の仕事は、雑貨部から喫茶部、購買部、買い物相談所長と何でもやりました。たと

えば、学生の月賦の滞納者の名前を張り出したり、保証人になっ

ていてる人に「あなたが保証人になつてゐる人が払わないと、あなたも買えないわよ」と言つて

払わせたりしました。また、組合員加入では、学生がやると60%くらいの加入率が、私が担当すると100%近くまでいきま

した。(安藤) 私のた美さんの印象は本部にデンといるといった感じ。当時ボスという言い方はなかつたけど、姐御という感じでした。私は、最初はホール係(食堂・喫茶)、その後、購買部、買い物相談所、本部。その後妊娠して本郷へ異動しました。印象に残っているのは買い物相談所の仕事です。学生が毛糸をもつてきて、寸法をはかり、近所の人に頼んでセーターを編んであげるんです。あと、本部で出納の仕事をやつた時に、兄が「お前信用されたんだよ。しっかりやりなさいよ」と言つてくれました。

(嶋根) 次の次は、その頃の女性にしてはめずらしく、天真爛漫だったわね、ものおじしなかった。職場を明るくしたんじゃないかな。その頃の女の子の人、より上の女の子の人たちですけど、はつきり自分の意見を言わないで、そのかわりかげでぶつぶつ言つたり、いじわるする人が多かったわね。(今井) 正規職員に採用され、書籍部に配属されました。主任が嶋根さんでしたが、嶋根さんは、昔の商店のおやじさんが小僧を仕込むように、本当に細かいことまでやらせて、ここがい

い、あそこは悪いといつてくれる。そういう教育を受けた。たとえば、寮生が試験前、夜本を買いにくるでしょ。それで、今井、おまえ、あの本持つてこい。電気つけちゃダメだぞというわけ。真つ暗な書籍部の中から寮生の言う参考書とかを持ってきて渡すわけ。それで嶋根さんがその寮生に、書籍部の従業員はこれくらいのことは当たり前前によれるようになっておりますから、と書籍部の自慢をするわけ。そういう職場だった。ある時、嶋根さんに取次店に連れて行かれ、担当者との交渉の場面に同席させられたことがあった。それは、教科書の仕入れ値引きの代金を現金で渡されるという結構危ない場面でした。当時の中小の取次店はどういったことが慣例として行われていて、嶋根さんは出版社の経験があるものだから、そういう業界の風習をよく知っていて、僕に知ってお

けというところで見せてくれたわけだね。こういったことは嶋根さんの個性かと思つていたら、安濃さんも同じだったね。購買部の商品の並べ方や組合員に対する応対の仕方とかいちいちうるさかった。どうも、一高雑貨部の時から寮委員会が従業員に対してきびしくしつけをしていたみたいだね。本郷との統一(本籍地は駒場) (今井) 49年に新生東大が発足し、旧一高と旧帝大では別々の面もあったが、大学運営もだんだんと一本化されていった。生協も駒場と本郷は別々に運営されていて、総代会も別々にやつていきましたが、大学運営の一本化とともに、生協だけ別々にやつていっているのはおかしいということになり、1960年頃には実質的に一本化していった。本郷と駒場が統一するというので人事交流があり、それで僕は本郷の書籍部へ、高橋忠信さんが駒場の執行役員として来た。安濃さんと嶋根さんは広がりをもってきた全国の生協運動の中で活躍されるため転出された。(安藤) 私は1961年に本郷に異動になったけど、なかなか情が移らなくて、気持ちの上ではずっと駒場が好きでした。駒場の家族主義、本郷の官僚主義といわれました。(今井) 駒場はもともと一高雑

貨部から生協になったものだから、本郷とは別々の生協みたいなものでね。僕もそうだけど、駒場で直接採用された従業員は、東大生協の従業員になつたという意識はほとんどなくて、駒場の生協の人間だと。みんな本籍地は駒場という意識だね。



楠の木の下で  
左から、嶋根、今井、安藤の各氏。

その後、みんなで構内を散策しましたが、構内は様変わりしてしましました。駒場寮はすでになく、跡地に生協の書籍部・購買部と食堂の入った2棟の厚生施設が建っていました。5号館ももはや跡形もなく、その前にあった楠の大木だけが伐られずに残っていました。この楠の木は東大、一高、そしておそらく駒場農学校の時代から百年以上、ここに学び・働いた数多(あまた)の若人の青春の喜び・悲しみを見つめ続けてきたことでしょう。(取材・3月26日、文責：中久保武雄、写真：對馬芳)

会員文芸

四季の会4月例会  
春動く川面に映る鯉の群れ  
月男  
花木水咲く頃会ふと言ひし入  
たけお

野仏を拜みをれば春蚊鳴く  
櫻子  
風を切り花を散らして燕来る  
忠男

山寺の太鼓の響き桜舞ふ  
益代  
ひとひらの花びら浮ぶコップ酒  
一紀

風荒れて芽吹く木立を  
いたぶりぬ  
待子  
場所取りのシート何時しか  
花座敷

摘みし茶の匂ひあふるる  
籠を抱く  
幸子  
政章

編集後記

\*今号は、50年代・駒場生協草創期の貴重なお話を伺った座談会特集といたしました。  
\*高橋晴雄さんの回想記続編は次号に掲載予定です。  
\*これを機に、編集子も、遅ればせながら『沈まぬ太陽』を通読しました。